

# 信徒ヴァイツェッカーと政治

永井清彦

## ◇はじめに

ほぼ四半世紀ぶりにかつての（西）ドイツ大統領リヒャルト・カール・フォン・ヴァイツェッカーの1985年5月8日の演説を若干の改訳をし、新たな解説を加えたものを出版する幸運に恵まれた。

最初の訳稿は雑誌『世界』（1985年11月号）に「四〇年目の五月八日に」のタイトルで掲載されたが、これはいま読み直す気にもなれない酷い訳だった。雑誌の締切り時間に追われていたことも一因ではあるが、より大きくは訳者に原文を理解する力がなかったためである。それでも大意を察してくださいと多くの方が雑誌掲載に終わらせるのは惜しいと出版社に投書を寄せられた。

日本では中曾根政権の下、「戦後の総決算」が叫ばれていたころだった。同じ敗戦国ドイツの大統領が「過去に目を閉ざす」ことはあってはならないときびしく訴える主旨が、拙劣な訳にもかかわらず、心ある人びとの心に伝わったのであろう。

あらためて改訳したものがブックレットの形で上梓されることになり作業に掛かったのだが、もともと五十分ほどでしかない演説の翻訳は文字通り四苦八苦の大難渋だった。ときにやや古めかしい雅語が用いてあるとはいえ、原文が難解な構文だったせいではない。

翻訳に手こずったのはヴァイツェッカーの演説が聖書の言葉に濃く彩られ、キリスト教の思想が深く染みこんでいるためであった。キリスト教に馴染みのうすい人間のやるべき仕事ではないと気づいたが、もはや後退は許さ

れなかった。『世界』の訳文を読み、「ドイツのプロテスタントの信仰のことは」が心に残ったが、全体としての訳文は「分かりにくいところがある」との厳しい批評を寄せてくださった先師・西村秀夫に頼り、ほうほうの態で完成させたのであった。矢内原忠雄門下の西村には半世紀以上も前から私淑してきながら、ついにキリスト教を遠ざけたままの自分である。

だから、「ヴァイツゼッカーとキリスト教」などという大仰な神学論を展開しようというのではない。聖書にすら縁の薄い俗物が、翻訳にあたっての苦心の一端を告白しようというだけのことである。

さらにこの際ヴァイツゼッカーが、けっして「聖職者」でも「宗教人」でもなく、「信徒<sup>ライエ</sup>」としての政治家であると自分を理解していることも整理しておきたいと思う。大袈裟にいえばヴァイツゼッカー演説を手掛かりにキリスト教と社会の関わり、「宗教と政治」というテーマに多少の光を当ててみようというのである。

#### ◇翻訳作業を通じてみたヴァイツゼッカー演説

そもそも岩波ブックレットの書名『荒れ野の40年』（1986年2月刊）が旧約聖書に由来することに演説の訳者ははじめは無頓着であった。

実はこの演説 — ドイツでは「五月八日演説」、ないしは演説のなかの演説、きわめつきの演説という意味でdie Redeと呼ばれることもある — の邦訳は、他に少なくとも三種類が公刊されていた。政治家の発言は翻訳権の問題がないという事情があるにしても、四種類もの翻訳というのは異例で、当時、日本でもこの演説に異常なほどの関心が集まっていたことを物語る。

四つの訳には思い思いの題がつけられていて、『世界』の拙訳には「四〇年目の五月八日に」とあった。「過去に目を閉ざすものは現在に盲目となる」が副題である。ブックレット版に改めるにあたって『荒れ野の40年』と巧みな命名を用意したのは『世界』の安江良介編集長（のち社長在任中に死去）で、訳者の改訳作業を待ちかねてくれた。

演説のなかでヴァイツゼッカーは旧約聖書を引用し、「四十年の歲月」の

もつ「大きな役割」を説き、「常に大きな転機を意味」しているとも強調している。安江氏の命名は、「四十年」の「荒れ野彷徨」を大戦後四十年のドイツの苦渋にみちた足跡に重ね合わせてのこと、と訳者は受け取った。名編集者の命名が高かった氏のセンスに感心させられたことだった。

それだけでは済まないことに気づいたのは後のことであった。分裂国家ドイツのキリスト者ヴァイツゼッカーはもう一つの分裂国家Koreaの問題に、そしてそこでの、ことにキリスト者の人権蹂躪（たとえば後の大統領金大中は敬虔なカトリックとして知られる）に大きな関心を払い、「世界教会評議会」の代表などとしてすでに1960年代から何度も訪韓していて、「朝鮮問題」に精通する明敏な安江編集長はそのこともよく知っていた。当時の日本では、ヴァイツゼッカーといえば長兄の原子物理学者カール・フリードリヒであって、大統領のリヒャルトはほとんど知られていなかった。にもかかわらず安江編集長がその演説にきわめて感度が高かったのは、リヒャルトのそうした活動を承知していたからであろう。

1986年4月に当時の韓国の大統領全斗煥が西ドイツを訪れた際、大統領としてのヴァイツゼッカーが公式の歓迎昼食会の席上、「ドイツ人ほどKoreaの分裂の苦しみを理解しうる国民はほかにはない」が、「韓国における或る種の内政上の動向を憂慮」する、と異例の挨拶をしたことを伝えと、安江編集長は『世界』同年7月号の編集後記をほとんどこの問題で埋めた。西ドイツのキリスト者ヴァイツゼッカーが極東の問題で果たしていた重要な役割をよく知っていたからであろう。

ヴァイツゼッカーは「あらゆる人間に深い洞察を与えてくれるのが『旧約聖書』だ」といって、旧約の故事を引用することを好む。旧約の世界がみごとに現代にタイムスリップして、現実の世界に重ね合わせられるのだが、『荒れ野の40年』の書名にはキリスト者ヴァイツゼッカーの信仰と同時に、政治家としての言動が示唆されているのだった。

ただ「荒れ野」にしても「四十年」にしても、演説に「キリスト教色」が濃いことの恰好の例であるにすぎず、翻訳するうえでの困難はなかった。

「荒れ野」には別の問題があった。明治以来、この語の邦訳は二転三転して、非キリスト者の訳者でも文語訳の「曠野」ないしは口語訳聖書の「<sup>あらの</sup>荒野」という読みには多少のなじみがあった。だが78年からの共同訳の「荒れ野」はいまも耳に馴染まない、というキリスト者は少なくない。明敏な編集者にヴァイツゼッカー演説の重要性を説き、あえて新しい共同訳を採用することを勧めた「朝鮮問題」に詳しいキリスト者による示唆があったのではないか、との推測を訳者は排除できないでいるが、これは余談である。

日本語訳のタイトルだけのことだが、ドイツで「四十年」のもつ意味については一言しておくべきだろう。

この演説についてあるドイツの知人から「荒れ野に叫ぶ孤独な預言者の言葉のようだ」と聞かされたことがある。大変多くの賛同をえた演説とはいえ、逆風もまた強かった。ドイツ国民からこぞって賛意と感動で迎えられたわけではない。すでに演説の前に「戦後四十年論議」は「もううんざり」と公言する声があった。西ドイツ歴史学界の大御所ゴロ・マンが『ツァイト』紙(1985年2月15日号)に寄せた「傷口をひらく記念日」というエッセイもその一つで、父トーマスとともにナチと闘った実績をもつゴロの論文は論議が「国論」の分裂を助長することに警告、「四十年はラウンド・ナンバーではない」、そんな年にわざわざ「傷口」を暴く議論を重ねるまでもあるまい、とも書いていた。

四十年論議にうんざり、という姿勢が見え見えだった。「マン」の名でなければ、このころの西ドイツでは「みなの前で口にだす」ことの難しい意見だったろう。「ポリティカル」に「コレクト」ではないから。

これに反駁を加えたのがヴァイツゼッカー演説だった。旧約からの引用で見事に切り返したのである。マンは反駁しなかった。キリスト教社会で聖書に反論することはむずかしい。

演説が冒頭と結びに「できるかぎり真実を直視すること」の大切さを繰り返し、戦った双方の側の被害者をひろく列挙して悼んでいるところはとくに

キリスト教の理解を必要としないだろう。しばしば引用される「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」というのも同様である。

だが、直視した真実を「心に刻む」必要があるのは「罪」の「赦し」のためではなく、「心からの和解」のため — などとなってくると、非キリスト者は立ち止まって考え込まざるをえない。「罪」などという考えにも馴染みが薄いからで、翻訳の筆も立ち往生する。

「心からの和解」と訳したもとのドイツ語はVersöhnungだが、この語幹には「(罪、過失の) 償い、贖罪」を意味するSühneがあり、ただ「和解」といったのではいかにも物足りない。そこであえて「心からの」を補って訳したのだった。

世俗の意味での「許し」「和解」と区別するための工夫だが、その真意を理解しての翻訳かという訳者にまったく自信はない。

そしてこの演説についての日本での大きな誤解は、多くは善意の人びとがこれが「謝罪」を意図したものと錯覚していることなのだが、求められているのは「心からの和解」であって、世間でいう「謝罪」ではない。そもそもキリスト者の考える「罪」の概念が非キリスト者に馴染みが薄いことからくる誤解・錯覚であろう。

翻訳で最大の問題はさし当たり「心に刻む」であった。「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と並んでしばしば引用されることになったが、もとのドイツ語Erinnerungは日常ごくふつうに使われる言葉で、独和辞典をみても「記憶、回想、思い出(の品)」などの訳語がでているだけ。フロイト心理学では「想起」と訳される。

英語ではrememberに当たる。ただremember Pearl Harborパール・ハーバー(真珠湾)を忘れるな、といえは「仕返し、報復」の響きがあるが、Erinnerungにそれがまったくない。

演説のなかでヴァイツゼッカーはこのErinnerungという語を繰り返し使う。そしてこの語に含まれている「-inner- 内面」の部分をとっても重視し、

「内面化する」「血と肉にする」というニュアンスをもたせ、ドイツ語として日常使われている意味から一步も二歩も先に進めているのである。

翻訳が困難なのは当然だった。

さんざん迷った挙げ句、前に名前を出した西村先生の示唆で「心に刻む」というほとんど造語に近い訳語にたどり着いた。このドイツ語に「心に刻む」という訳語を与えた先例はなかったはずである。

問題は、どういう訳語を与えるかに止まらない。演説全体の性格にも関る。

五月八日演説が日本では多く「恥ずべき過去 直視を」(『朝日新聞』1985年12月8日付一面の論説主幹松山幸雄の署名入り主張の見出し)の文脈で読まれてきたことは確かである。過去の真実を直視し、「心に刻む」のが気楽な作業ではないのは当然ともいえ、ことに日本では自らの歴史を反省しながら振り返ることを指して「自虐史観」などと非難し、軽蔑するかの言葉さえ横行することになっていく。

ドイツでも同様で、「もういい加減にしてほしい」との民衆の本音が、知識人の間では「歴史家論争」などといった形をとっての議論の応酬となった。

しかしその反面で、ヴァイツゼッカー演説が「心に刻む」ことに「恥ずべき過去を直視」する以上の、きわめて積極的な意味を与えていることも確かである。

演説の行われた1985年、東西に分裂したヨーロッパ、そしてドイツの統一が近い将来に現実の問題になると見通していた人はいなかっただろう。ベルリン市長、首相を務めたヴィリー・ブラントが、遠い将来にドイツが統一されるにしても「自分は生きてそれを見ることはなかり」と言ったのは81年のこと。あのころベルリンの壁が、たとえそれがどんなに非人間的、不自然ではあっても、崩壊する事態がちかちか現実にかかるなどと本気で考えていた人はいなかっただろう。

ところが歴史が人間の考えを先回りし、あれよあれよという間に統一が実現したのはヴァイツゼッカー演説から四年後。東ドイツの人びとは演説のなかの「一つの民族」をスローガンに掲げてデモを繰り返し、ブラントはかつ

での悲観論を捨て、「一緒のものは一緒に育つ」と高らかに宣言した。

ヴァイツェッカーの演説には「法律上の主張で争うよりも、理解しあわねばならぬという戒めを優先させねばなりません」ともあった。ポーランドとの「心からの和解」のためには両国間を流れるオーダー・ナイセ河を国境線として容認することが不可欠であることをいっているのだが、これは戦前のドイツの領土のほぼ四分の一を放棄することを意味する。年来の主張ではあっても、政治家が軽々しく口にできる言葉ではない。

演説は1985年3月に共産党書記長になったゴルバチョフのソ連の変化の「兆し」を見逃してはならないことを指摘し、東西対立の構図が変化する可能性を仄めかしていた。「(1945年の)五月八日が、すべてのドイツ人を結びつける史上最後の日付でありつづけることはない」とも語っていた。持って回った言い方だが、いつのことかは別として東西ドイツの統一を断念しない強い意志が込められていた。ただ、きびしい世界情勢のなか、ドイツの要人が統一をあからさまに語ることはタブーに近かったから — 何分にも近隣にはドイツの統一を心から歓迎する国は一つとして見当たらなかった — 歯切れはあまりよくない。

大統領は旧約の民の言葉にことよせて、言外にドイツ統一への展望を語っていた。「あらゆる人間に深い洞察を与えてくれるのが『旧約聖書』だ」といったあと、「心に刻む」ことこそユダヤの信仰の本質であり、これなしには「心からの和解」はない — と十八世紀のある旧約の民の、実にしばしば引用されることのある名言をもちだす。

忘れることを欲するなら捕囚は長引く  
救いの秘密は心に刻むことにこそ

がそれである。

「捕囚」の原語は Exil(英語ではexile)である。普通の独和辞書には「(国外)追放・流謫・流刑地・亡命(地)」の訳語が並び、「バビロン捕囚」は例とし

て挙げられている程度。ところがドイツ書を基にした『聖書大事典』(教文館)では Exil は「捕囚」だけであり、イスラエルの民のバビロンでのそれが詳述されている。

通常の独和辞書に従えば、Exilは主として国を失ったユダヤ人の「ディアスポラ」を連想することになるのだろうが、「捕囚」と理解すると東ドイツの、ひいては東ヨーロッパの人びとが共産主義の压制下に置かれていることに連想が走るのは自然だろう。

「救い」Erlösungは「解放」とも訳せる言葉である。ドイツ語の辞書にはその動詞形erlösenはbefreienとある。「自由にする」意である。そしてErlöserは救世主である。

となると「心に刻む」ことでソ連の支配からの解放、さらに「ドイツの統一」を予見することが可能にもなる（「捕囚」は八六年の先訳では「追放」としていた。今度の改訳でもっとも重要な点である）。

ヴァイツゼッカーは法律を専攻するゲッティンゲン大学時代に、ある旧約聖書学者の授業に強い印象を受けた、と書いている。この教授を通じて「宗教的な意味で『心に刻む』ことの力についてもっとも深い理解をしているのは、たぶんユダヤ人の信仰で…（それは）彼ら自身の歴史における神のみ業を経験することであり、同時に救い — つまり内部分裂の克服、分離されたものの再統一 — への希望」であることを学んだ」と自らの『回想録』に記している。

こうみえてくると、Erinnerungの訳語として「心に刻む」に辿りつくのに難渋したのはごく今さらながら当然のことだったと思えてくる。そして「捕囚」からの「救い」と解することで、「五月八日」演説が「荒れ野」から「沃野」への「解放」、つまりドイツ統一への展望を示したものと読めることになる。

ベルリンの壁崩壊から二十年の2009年秋、八十九歳になったヴァイツゼッカーの新著Der Weg zur Einheit『統一への道筋』には、1960年代始めキリスト<sup>ライエ</sup>信徒としての立場でポーランドとの「心からの和解」を唱えだし、「捕囚」



からの「救済」への跡が謙虚な筆致で綴られている。

ポーランドとの和解には、現実には広大な旧領土 — 北方四島どころの話ではない — の断念を意味し、だからすぐには同時代のドイツ人同胞の理解を得られなかった、いや激しい反撥を呼んだが、次第にその理解が浸透していく辛抱強い過程が記されている。

#### ◇「宗教人」か 政治家か

キリスト教の考えに従い、聖書の言葉を多用するからといって、ヴァイツゼッカーはけっして「聖職者」でも「宗教人」でもない。職業としては政治家の「信徒<sup>ライエ</sup>」である。生涯をざっと辿りながらそのことを吟味していこう。大袈裟に言えば「政治と宗教」というテーマに多少の光を当ててみることになる。

父方の曾祖父がギリシア語から訳した聖書を読み、「公」「社会」— 『回想録』ではしばしばÖffentlichkeitという言葉を用いる — のために献身することを旨とする家風に育った。代々、信仰と公職とがごく自然に結びつけられるのである。父は軍人から外交官に転じ、八歳年長の長兄は原子物理学者にして哲学者。宗教的な雰囲気こそなえる母は社会的な関心が強く、ナチ党の教会政策に反対する「告白教会」の指導者が逮捕されると、釈放を求めてナチの高官に直談判にでかけるといった女性だった。

「家族や環境に条件づけられた、機会の不平等」という表現で、リヒャルトは自分の幼時の恵まれた家庭環境に感謝している。

十八歳で徴兵され、第二次大戦中の六年間は兵役で過した。戦後は大学に戻ったのも束の間、学生の身分のまま、いわゆる「ヴィルヘルム街（外務省関係）裁判」の被告になった父の弁護団の助手を務めた。改めて「自然科学と精神科学が共生」していたころの大学生活に戻り、主専攻は法律だが、神学、歴史学も学んでいる。

卒業後、官職への道を模索したが、ヒトラーの下での外務次官の三男でプロテスタントのリヒャルトは、カトリックで反プロイセンの気風の強いケル

ン育ちのアーデナウア首相に忌避され、実業界に入る。だが、経済の実務に専念したわけではなく、「社会的市場経済」と呼ばれる体制の現場での、経済政策立案の習練であった。西ドイツ独自の「共同決定」の実施などに尽力している間、著名なマルクス主義の哲学者テオドーア・アドルノなどと接触したこともある。

経済界での活動に満足できないリヒャルトは、「ドイツ福音主義信徒大会」Deutscher Evangelischer Kirchentagの場での活動に情熱を傾けていく(Kirchentagは教会大会と訳されることも多いが、教会が聖職者のいる建物を連想させるのに、この場合のKircheは「信仰共同体」とでも解すべきもの。むしろ信徒大会の訳のほうが相応しいだろう。そしてこれは聖職者を中心とするドイツの州教会の、いわば公式の連合体の「ドイツ福音主義教会」Evangelische Kirche in Deutschland 略称EKDとは別組織である)。

ナチの時代、ヒトラーの支配を受け入れた教会組織主流の「ドイツ的キリスト者」に従わなかった「告白教会」が催していた「福音主義週間」の傳統を信徒大会は継ぎ、戦後は1949年以降、ほぼ二年に一度、あちこちの大都市で万の数の在家の信徒を集め、信仰だけでなく、広く政治、社会のさまざまな問題を論じ合うフォーラムである。80年代初めには時の政府、そして聖職者たちの教会組織の意向を遮って「平和」を中心テーマにして論じ合い、会のあとでは十万を越すデモ行進を展開したこともある。

ヴァイツゼッカーはこの信徒大会でたちまち頭角を現し、大会を創設した前任者に推され、実業界にあるまま大会議長のポストに就いた。本人の言うところでは「名誉職だが、内容的にも時間的にも重責」を担うことになったのは1964年、わずか四十四歳のときだった。

翌65年の大会のモットーは「自由に堅く立つ」だった。新約聖書ガラテア人への手紙にある言葉である。

そしてこれは議長の閉会演説の題でもあった。

当時、西ドイツは戦後初の不況に陥り、つれて政情も不安定だった。「豊

かさは、権利の保証に役立つものでなくてはならない」「保証すべきは強者の優先権ではなく、力なき者への敬意と、すべての人びとのための秩序」である、などというのがヴァイツェッカーの閉会演説の内容であった。

約十二万の信徒を前にしての演説で、政治家としても不可欠な天分を自覚することとなった

「自由に堅く立つ」は、ヴァイツェッカー氏のもっとも好む聖句であろう。1989年にベルリンの壁が崩壊した直後にはベルリンの教会での聖餐式で、そして1990年の統一祝賀の式典でも、また『回想録』の日本語版序文などにもこの句が登場する。なによりも自由を尊ぶ氏の姿勢を示している。

しかし、政治家としての原点となる発言をしたのはまだ信徒大会の議長になる前の1962年、ベルリンに壁ができた翌年のことであった。

この年、兄のカールらプロテスタントの指導的立場にいる八人の知識人が「テュービンゲン覚書」とよばれる政策提言を発表した。社会全般にわたる長文の提言で、カトリックのアーデナウア率いるキリスト教民主同盟CDUの政策に対する、ことに教育と外交に重点をおいた批判である（カトリックには Soziallehre「社会教説」の考えがあり、カトリック信者の多いCDUには「社会委員会」がおかれ、また19世紀末以来の教皇の回勅の習慣があって、社会の諸問題についての基本的な視点を提供する。が、プロテスタントにはかならずしもこの習慣が確立していない。プロテスタントの錚々たる面々による「テュービンゲン覚書」はその空白を埋めるべきものであった）。

リヒャルトは「理解し合わねばならないという戒め」に従った外交問題についての草案をまとめることを兄に求められた。その作業をもとに、「再統一・ヨーロッパ統合・東方政策」など外交政策についての処女論文を『ツァイト』紙（1962年8月3日号）に寄稿した。一口で言えば、二つのドイツの存在を認め、オーダー・ナイセ線を承認し、東側、ことにポーランドとの和解を果たしていこうという内容だった。西側統合に邁進してきたアーデナウアの外交路線に修正を迫り、東側に一歩進める内容である

「今となっては当たり前のような内容も、当時ははげしく攻撃された」と自身がのちに書いている。オーダー・ナイセ線の承認とは旧国土の四分の一を断念し、当時の人口の約五分の一にあたる千二百万人から「故郷」を奪うことに等しかったから、ヴァイツゼッカー論文が「激しく攻撃された」のも当然だし、民衆の支持が頼りの政治家には禁句でしかない。だが、この決断なしにはポーランドとの和解は不可能と見通しての、職業政治家になる前の提案だった。

いわば私的な、今風にいえばNGOの「テュービンゲン覚書」、ヴァイツゼッカー論文をうけて、ドイツ福音主義教会EKDは1965年、いわゆる「東方教書」を発表する。プロテスタントの側からの東方政策の提案だった。

ヴァイツゼッカーは66年、信徒大会の議長は兼ねたまま実業界を去り、キリスト教民主同盟の連邦幹部会に入って政治の世界の人間になった。ただ国会に議席をもったのは69年の選挙のときで、このとき社会民主党が第一党になり、ウィリ・ブランドが首相になって華々しく東方外交を展開していった。

ブランドはまだベルリン市長だった60年代はじめ、「テュービンゲン覚書」とほぼ同じころから「接近による変化」とのモットーを掲げて対ソ・東ヨーロッパ外交を模索していた。基本線では「東方教書」と一致していたが、こちらはきびしい権力政治の分析から割り出された、いわばプラグマティックな政策だった。

ヴァイツゼッカーはブランド首相の政策を容認した。だが自分の属する党はブランドに猛反対、「和解」のためにはオーダー・ナイセ線の承認が必要との立場のヴァイツゼッカーは、離党こそしなかったが、自分の党での異端・少数派になってしまう。

ただしキリスト教民主同盟は1983年に政権復帰したとき、ブランドの東方外交をそのまま受け継ぐ。猛反対が党利党略の政党エゴにでていたことを確認する結果になった。

みずからは超党派の、「和解」を求めての東方政策を追求するヴァイツゼッカーは、こののち「政党政治」をきびしく批判しつつけることになる。

紆余曲折こそあったが、テュービンゲン覚書からほぼ三十年ののち、東方との和解政策は1989年のベルリンの壁の崩壊、90年にはドイツの統一の形で実を結んだ。ヴァイツェッカーは「言葉は忍耐強い」と呟いた。

キリスト教民主同盟が1978年、結党以来はじめて党の基本綱領を策定したとき、中心になったのはヴァイツェッカーだった。前文には「キリスト教の信仰から一定の政治綱領が導き出されるものではない。その信仰からくる人間理解が責任ある政策の基盤である」とあって、ここにヴァイツェッカーの考える政治と信仰との関係が滲み出ている。

ヴァイツェッカーはこのとき、自分の党の名が「キリスト教」を冠することに疑問を呈している。さすがに党名は変更することにならなかったが、信仰と政治綱領とは別物であるべきことを言ったのである。基本綱領策定の議論の間、「党に考えることを教えた」との評判がたった。

ヴァイツェッカーは別の機会にカトリックの神学者たちを前にして「キリスト者としてわれわれは、究極のものとその一歩手前のものを区別する…われわれは究極のものなかではなく、その一歩手前のもの、つまりまだ主に救済されていない世界に生き…キリスト者としても世俗の秩序に組み入れられている…この緊張がキリスト者に対して政治においても日々新たな挑戦となっている」と語ったことがある。

「キリスト者としても世俗の秩序に組み入れられている」ことを自覚しているから、ヴァイツェッカーはけっして非武装の平和主義者ではない。「武器（＝原子力兵器）によってこの武器に沈黙を強いる」抑止戦略を「人間の理性と感情をもって理解することはできない」が、しかし「誠実に考えてみれば」ヨーロッパがこうした武器なしに戦争に巻き込まれないようにすることは、より困難だったはずで、これこそ「一つのアポリア、一つの矛盾であり、だれにも容易には逃れられない深刻な葛藤である」と演説したこともある。冷戦の厳しいころのことである。

ヒトラーの暴虐な支配と不正からドイツと世界を救ったのは…暴力に対抗

する暴力と決断だった — と断言したこともある。

それぞれ尊敬する神学者ディートリヒ・ボンヘッファー、そして長兄カールの影響がみてとれる発言である。

信徒の政治家ヴァイツェッカー、とくにこの二人のプロテスタントの先達から深い人格的影響を受けていることに同意するであろう。

#### ◇結び

ヴァイツェッカー元大統領の発言を訳してきて、しばしば聞くことになったのが「日本にはこんな政治家はいないな」の嘆息とも羨望ともつかぬ声であった。

「政治とは、道徳的な目的のためのプラグマティックな行為」と言ったのは一般にはプラグマティストとしての評判の高かった元首相、1918年生まれのヘルムート・シュミットで、1920年生まれのヴァイツェッカーとの対談を目にすることが二十一世紀も十年を過ぎたいまもあるし、それぞれに新しい著作の発表も続けている。

シュミットは、ヴァイツェッカーと異なり、キリスト教の言葉をしばしば口にするのではない。が、「自由」を考え抜いている哲学者との親交があり、深い思索に支えられた発言は「日本にはこんな政治家はいないな」と思わせるもう一人である。ここには「自由に堅く立つ」との聖句を好んで引用するヴァイツェッカーと通じるところがある。二人にとって最高の価値は「自由」である。

そのヴァイツェッカーについては「政治と精神、権力と道徳は決して対立物になってはならないことを証明するために、精力的かつ独立を保ちながら活動してきた」との評がある。

すると、ここではヴァイツェッカーにおける「政治」と「信仰」とをスケッチしたが、それは「政治」と「精神」という視点であるべきだったかもしれない。

その方が、「抑歐州ニ於イテハ憲法政治ノ萌芽セル事千餘年…マタ宗教ナ

ル者アリテ之（＝憲法政治）ガ機軸ヲ為シ…」と嘆じた明治憲法の起草者の苛立ちに近寄れたのかも知れない。「宗教なき政治はビジネスである」との辛辣な警句に多少とも抵抗できたのかもしれない。

日本における政治と道徳との不幸な分離をもっと際立たせることができたのかもしれない。

ヴァイツェッカー大統領は十年の任期を終えたあと、1995年夏の日本に講演旅行にやってきた。敗戦から五十年、異教徒の日本人相手のヴァイツェッカーの口から基督教の言葉はでなかった。そして基督教に色濃く染まっていて、普通の日本人には分かりにくいはずの『荒れ野の40年』がもっていた「迫力」を欠いた — 日本での「政治」の定義がドイツのそれと異なっているためであろう。

〔付記〕本論文は、2009年12月18日に開催された桃山学院大学キリスト教会（キリスト教センター共催）における研究発表原稿を寄稿していただいたものである。（編集委員：滝澤武人）